

図書館の館報・紀要(2)

早稲田大学図書館紀要

この雑誌の趣旨については、編集後記から抄出摘記することによって、ねらっているところが判明する。

▽今日、図書館は、あらゆる面から、一層科学されなければなりません。当館においても、従来から図書館学的研究は行なわれておりましたが、今後これをさらにさかんならしめて、図書館運営の実際面に即応させるために、今般、あえて本紀要の刊行を企てたのであります。

▽本紀要刊行の趣意の他の一半には、館蔵図書資料の紹介ということがあります。すなわち、建学以来収蔵された図書資料は、珍籍、稀書等を含めて約七十万冊の多きに達しておりますが、これらは正に活発に利用されるべきものであります。そのためには、まず、各種図書資料の翻刻、あるいは書誌、解題、書目、目錄等の精力的な作成が必要となります。

(第一号より)

▽図書館職員には、日常館務のほかに、不断の研究的態度が、責務として要請されております。……きびしい研究テーマをみずからに課するべき責務があるといえます。紀要の意義の一半が、おのずからここに分明いたします。

▽また、研究者にとつて、特定の研究資料が、いかに激しく求められるものであるかは、われわれの日常よく知るところです。館蔵資料が、翻刻・解題・書目・索引等の形で積極的に紹介されることの意義は、カード目録により単なる案内に幾倍するものであるかは論ずるまでもありません。紀要の意義の他の一半です。(二号より)

▽……当館では近く専門職制が確立する方向にあるが、このことは、専門職館員の責任の重大と、研究的態度の意欲的の活発化を意味するものでもなければならぬ。管掌職務上の研究はもちろんで、その他の各種研究の成果は、当然に紀要誌上

に雲集することであろうが、紀要は、まさに館の学的水準のバロメーターとなり、梁骨を示すものとなることを銘記しなければならぬ。(第三号より)

▽要するに、図書館紀要には、いきおい書誌学的系統のものと同書館学的系統のものが混載の形で登載されることになるが、これが、いわゆるもつとも図書館紀要らしい形であるというべきであろうか。(第五号より)

現在まで、昭和三十四年の創刊から十七冊を数えるが、文字通り、右の目的に向って、今日まで進められてきている。研究、紹介、目録、翻刻などの構成で、早稲田大学図書館の豊富にして価値ある文献について、種々の形で、活発に発表されてきて、大学図書館の紀要中、その活動に矚目すべきものゝ一つと云ってよからう。

なお、別冊として、二葉亭四迷資料、古短冊集目録、曲亭馬琴書簡集の印行配布も行なつて、それぞれの方面に効果をあげている。